

【参加体験報告】ルーマニア平和研究所 (PATRIR) での非暴力ワークショップ参加報告

伊藤武彦 (和光大学)

ルーマニアのクルージュ・ナポカ市にある平和運動・訓練・研究施設、PATRIR で2004年の5月5日から9日までの5日間、「ガンジーから現代社会的政治的運動へ：非暴力的行動の実践のために」というワークショップが開かれ、参加する機会をえた伊藤が体験を報告しました。参加者は約20人、ヨーロッパ諸国、カナダ、米国、パレスチナ、等から約20名でした。東アジアからは伊藤一人でした。

ファシリテータは、ノルウェーのトロムソ大学平和学大学院教員のヨルゲン・ヨハンセン氏でした。

初日は、自己紹介と全体の説明の後、講義形式とグループ討論の組み合わせで、非暴力の概念について、その複雑性を検討しました。暴力は人間の間に限られるのか、動物の殺戮はどうか、食物としての植物に対して「暴力」といえるのか。さまざまな意見が交錯するなかで、非暴力は、平和的なライフスタイルと平和をめざすテクニカルツールとして考えていくという方向性が出されました。

戦争・暴力を取るか非暴力を取るかという問題は、どちらも政治・経済・社会・個人的な問題解決のための手段という問題であり、紛争解決の方法という点が強調されます。トランセンドの理論 (www.transcendjapan.org/ www.transcend.org)では、紛争は人間社会において不可避なもので、それを無くすことはできないが、その行動様式を暴力的な方法から非暴力的な方法へと転換することが課題であるとされます。

歴史教科書は、紛争＝コンフリクトでを、その暴力的過程を中心に記述されているけれども、紛争の平和的＝非暴力的な転換のプロセスは、多くの場合があるにもかかわらず、その記述と分析が不足しているために紹介されないことが問題とされます。暴力には、戦争などの直接的暴力と、人々の基本的な人間的ニーズが人為的に妨げられている搾取・抑圧などの構造的な暴力があります。

構造的暴力についていうと、ある算定では、3600万人が毎年、水や食物や薬の不足で死んでいます。これらは一人一日あたり2ドル(年間では8万円程度の費用)があれば、解決されるとしています。戦争とは、大量殺人をとともなうコンフリクト(それ自体)のことではなく、暴力による問題解決方法の一つなのです。

非暴力的なライフスタイルでは、コンフリクトをどう扱うがポイントとなります。その実践のためには、文章・漫画・映像などのかたちでドキュメント(記録)することが大切です。

また、誤った敵のイメージ(例えばイスラム教徒)をつくらないようにするためには、自分について知っていることと、相手が私について知っていることの領域を広げていくこと、カウンセリング心理学でいう「ジョハリの窓」を大きくすることが必要です。今回で

は、非暴力活動をしている2人のパレスチナ人青年と知り合いになり、パレスチナについての自分のステレオタイプが改められました。

初日午後には、コンフリクトをどう分析するかが問題とされました。態度 Attitude と行動 behaviour と矛盾 contradiction のABCを頂点とするコンフリクトの三角形が紹介されました。

コンフリクト=態度+行動+基本矛盾

という式となります。戦争はコンフリクトにおける行動様式であり解決方法の一つなのです。

コンフリクトが暴力的になった場合、その時間軸を、暴力以前・暴力の最中・暴力の後、という3つの時期に分けて分析する必要があります。例えば第2次世界大戦は少なくとも1918年にさかのぼり、現代にいたる歴史過程のなかで分析する必要があります。

このなかで「暴力以前」の段階で、コンフリクトにおける暴力回避の努力は大切なことです。しかし、そのような成功例が多くあるにもかかわらず、なかなか報道されません。暴力の後の段階では、3つのR、停戦合意 resolution、復興 reconstruction、和解 reconciliation が必要です。

コンフリクトにおける当事者・行為主体（アクター）は、 $n>2$ 、すなわち、いわゆる加害者・被害者という2者関係だけでなく周囲のアクターも考慮に入れることが必要です。またアクター（政府、企業、団体など）の中にも、リーダーと中間層と下層の3つのレベルがあることも分析されなければなりません。例えばコソボの空爆はNATOの軍人の反対にもかかわらず、米英の指導者によって決定されました。

このような複雑さを、グループごとに課題設定して議論しました。伊藤のグループではエイズ治療薬が薬品会社の特許権により高価なものとなり、それを必要とする貧しい人々とのあいだのコンフリクトをどうするかについて、様々なアクターを想定してケース・スタディしました。

2日目では、非暴力的行動の威力と限界についてがテーマとなりました。ガンジーは非暴力的なライフスタイルと政治活動を組み合わせ、イギリス植民地であったインドを独立に導きました。祈りと、不服従と、創造性と、自己の形成が結びついていたのです。平和とは戦争反対ということではなく、非暴力的方法でコンフリクトを転換するという手段なのです。

ガンジーをはじめとする非暴力の文献について紹介がありました。1945年以降の新国家独立について、暴力的に達成した例と非暴力的に実現したケースとが紹介されました。

また、エクササイズとして、チェチェンとロシアのコンフリクトについて歴史的経過の説明の後、グループ討論により、アクターの同定をおこない、チェチェン内、ロシア内、国際社会の3つのグループを新たに再構成しました。討論は翌日に及びました。

3日目は、チェチェンのコンフリクトについての、グループ内討論と全体討論を交互におこない、各アクターの目的を分類し、どのように非暴力的な方法が適用できるのかを検討しました。

この日の夜は「A force more peaceful」のビデオを見ました。ナチス占領下でのデンマーク人の市民的抵抗、ポーランドの労働運動「連帯」による政治体制の平和的移行、クーデターによって成立した軍事政権打倒のための国民投票運動を知ることができる貴重な教材でした。

4日目は、ボイコットや法廷闘争など非暴力抵抗の様々な形態について検討しました。また、非暴力行動でのユーモアの役割も強調されました。集団の構造やネットワークの仕方についても、いくつかのタイプが紹介されました。運動を進めるときの実際的な問題も討論しました。

最終日には、運動内部での「困った人」の問題、イラクにおける人道支援の紹介、パレスチナ人による非暴力のネットワーク、徴兵に対する市民的兵役拒否、今後のワークショップ参加者の全体的課題について検討しました。

全体的に、多様な参加者からの声を聞くことができ、出席して良かったと思います。また、平和学の価値中立性についても、初日の夜の、ヨルゲン先生の講演会で、「医者は病気の原因を解明するだけでなく患者を治療しなければならない倫理を持つように、平和研究者は、戦争の原因を解明するだけでなく、より良い平和な社会の形成に専門家として参加しなければならない」という言葉が心に残りました。もっとも「手術は成功したが患者は死んだ」では困るわけですが。